人形劇

人形劇、絵本、手品、腹話術…
子供からもお年寄りからも拍手喝さいの保育士たち

愛と夢を乗せて未来へ走る。

ひざに赤チンぬって走り回っていた頃、子供にとって蒸気機関車（SL）はスーパースターだった。アレに乗るとどこか遠くに行けそうで、夢があった。なかでも貨物用蒸気機関車D51（デゴイチ）は憧れの的。わが国最多の車両数を誇り、大人も子供も夢中になった時代がある。「人形劇を通して、そんな夢と希望を運ぶ蒸気機関車のようになりたくて…」。代表をやってる保育士の長野憲子さんは当時を懐かしそうに振り返る。以来三十年間、D51は走り続けてきた。

「スタート当初はパワーもあり、怖いもの知らずでしたね。みんな独身で元気だったし。大掛かりな舞台、たくさんの小道具、手の込んだ人形など、すべて手作りでしたから」と感慨深げ。長野さんの呼び掛けで、保育園や幼稚園の保育士さん、国立病院の職員、お坊さんなど十五人ほどが集まったという。かなり大々的に活動していた様子が浮かぶ。それがいつしか休止状態に。

再スタートしたのは七、八年前のことだ。今度は保育士六人で動き出した。月二回ほどの“発車”で、“停車駅”はお年寄りや子どもたちの待ってる場所。「人形劇、工作教室、大型絵本、読み聞かせ、お年寄りには手品、腹話術、南京玉すだれなど、ホントにたくさんの出し物、よくやったよね」と、川南幼稚園に勤めるメンバーの清野紀美子さん。しかし、こんなハイスピードは長くは続かなかった。それは保育所が土曜日も一日保育になってしまったこと。全員揃うのがまた難しくなってきたようだ。

今は、月二回の読み聞かせと、十二月の子供会での人形劇に絞っている。「自分たち自身が楽しめることがイチバン。日頃忙しいからこそストレス解消にもなり、もちろん仕事にも活かせます」（清野さん）。

そろそろ定年に近づいたメンバーが四人いる。その“通過駅”を過ぎると、夢を乗せたD51はさらに快調に走り続けるのだろう。

●人形劇グループD51

時代劇

熱烈な地元ファンに支えられるチャンバラ劇一本の素人劇団

笑いあり、涙あり、明日からの活力あり。

時代は江戸の中期……そこへ一人の浪人が…。毎度お馴染み川南町が誇る青鹿一座の時代劇、平成十四年十一月にやった『用心棒稼業』の冒頭である。あの有名な黒澤明監督作品の劇場版だ。会場のトロントロンドームは熱気に包まれ、拍手と笑い声。なにせ“名役者”はみんな町の住人、観客にとって身近な存在だ。

詰め掛けたお年寄りや子供は大喜び。座長の河野長茂さんは「みんな好きだね、チャンバラシーンが。年配のお客さんも多いからとくにそう」といいながら、時代劇ばかりやる理由を「分かりやすい、演じやすい、盛り上がりやすいから」と話す。川南では無農薬いちごを栽培する座長も、かつて東京では役者としてならした人、映画では有名俳優との共演もある。しかし一座のメンバーはほとんどが素人。高校生、大工、農家…、親子づれもいれば、飲んでいて河野さんにスカウトされた者もいる。全部で二十四人。でも、みんなスゴく楽しそう。演じてみたい、と集まってきた人たちばかりだからだ。

そもそもトロントロンドームができたとき、ドームを使ってやる芝居やミュージカルを募集している話を聞き、それなら、とさっそく役者や裏方を募集したところ、かなりの人数が集まった。それが現在の青鹿一座の始まり。

普段は写真屋さんをやってる劇団員の白石和光さんは「最初の頃はスゴかったね。お寺や地区の公民館でやるのはいいけど、幕も照明もない。農業用の黒いビニールを幕代わりに、電照菊用の裸電球をプランターに入れて照明にしたり…、これこそ手づくりの芝居って感じだったな」と、ちょっぴり苦笑いも。こんなユニークな一座、話題にならないわけがない。テレビにも出演したり、町のあちこちからお呼びがかかったり…。結婚式、地区の公民館、老人ホーム、花見の特設ステージなどなど、どこにでも出かける。

年に一回、ドームでやるのが一番大きな公演だけど場所は選ばない。みんな芝居が好きだから、と活動は広がるばかり。間違いなく川南の活力を産み出す大きなエネルギー源のひとつである。

●青鹿一座